九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

蘇軾における「東坡」の意味

正木, 佐枝子
九州大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9661

出版情報：中国文学論集. 25, pp.55-72, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

蘇軾における「東坡」の意味

正木佐枝子

はじめに

宋代の文人蘇軾は、筆禍事件である「烏台詩案」によって、元豊三年（一〇八〇年）、齢四十五にして黄州に流謫された。その処遇は「（蘇軾）公勅に準じ検校尚書水部員外郎を責授され、黄州團練副使に充てらる、本州安置、公事に簽書するを得ず。[1]」である。すなわち、一見すると体裁の良い職を与えられたようだが、その実は、蘇軾は黄州から出られず、公文書に署名できない、つまり行動の自由と政治的権力を剝奪されたのである。そしてその翌年、蘇軾の友人は、蘇軾の日に日に困窮の度を増すのを見かねて荒れ地を借り受け、蘇軾が耕作できるように取り計らった。そこで蘇軾はその借地に「東坡」と名づけて耕作を始め、有名な「東坡八首并敍」（以下「東坡八首」と略称）詩を詠んだ。またその翌年、蘇軾は在家仏教徒の表明である「東坡居士」と自ら称するようになる。[2]

さて、ここで蘇軾が用いた「東坡」については、従来、白居易の「東坡に花を植う」等の詩に由来し、蘇軾が白居易の文学を敬慕した表れだと考えられてきた。しかし筆者は、白居易と蘇軾の経歴を比べてみたところ、その敬慕は単に文学上の思いに止まらず、政治上の思いをも含むと考えるに至った。そこで本稿では、まず蘇軾における「東坡」の意味について再検討し、さらにその意味と、蘇軾の「東坡居士」の名号や「東坡八首」詩の内容が、いかに関連するか述べてみたい。

一

まず、蘇軾における「東坡」の意味について、従来の説の出所を確かめておこう。これは南宋・周必大の意見に始まるようである。その言とは以下の通りである。

白樂天　忠州刺史爲りしとき、「東坡に花を種う」二詩有り。又「東坡に歩む」詩有りて云ふ「朝に東坡に上りて歩み、夕べに東坡に上りて歩む。東坡の何こぞ愛するところ、此の新たに樹に成りぬるを愛す」と。本朝の蘇文忠公輕がるしく許可せず、獨り樂天をのみ敬愛し、屢しば詩篇に形はす。蓋し其の文章は皆な辭達を主とし、而して忠厚なること好く施れ、剛直なること言を盡し、人に情有り、物に著く無く、大略相ひ似る。黄州に謫居し、始めて東坡と號す、其の原は必ず樂天忠州の作に起る也。[3]　（『二老堂詩話』東坡立名条）

このように周必大は、「白居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ白居易だけを敬愛し、その詩にはしばしば白居易の詩を取り入れており、その文学は白居易と似た面を持つこと」を述べ、「蘇軾が『東坡居士』と名号したのは白居易の詩に由来する」と考えるのである。この説は今日まで疑われることなく踏襲され、例えば、小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』[4]においても、同様の見解を採っている。但し、蘇軾自身は、「東坡」の命名の由来について何も語っていない。

では以下に、白居易の詩のうち「東坡」の語が使われるものと、その詩を書いた時の白居易の官位から、考察を始めたい。白居易には、周必大が言及した「東坡に花を種う」二詩と「東坡に歩む」詩の他に、「東坡に種ゑし花樹に別る」両絶詩と「西省にて花に対し、忠州の東坡に花樹新たならむことを憶ひ、因りて東楼に寄せ題す」詩がある。白居易は元和十年（八一五年）越権の責めによって江州司馬に貶謫され、同十三年（八一八年）忠州刺史に除せられた。とにかく貶謫地の江州から脱出したいと願って実現した地方官であったが、忠州は、江州より都に近いとはいえ、貶謫には違いなく、白居易は自らの境遇を嘆くこともあった。城東の堤すなわち東坡に花樹を植えた

のは、その消憂のためだったであろう。

ここで注目に値するのは、これらの詩のうちに、単なる植花や消憂以外の心情が現われていることである。まず「東坡に花を種う」其二詩では、

養樹既如此、養民亦何殊。　樹を養ふは既に此の如し、民を養ふも亦た何ぞ殊ならむ。
將欲茂枝葉、必先救根株。　まさに枝葉　茂るを欲せば、必ず先ず根株を救はむとす。

という。白居易の治政への意欲を表わしているのである。次に「東坡に種ゑし花樹に別る」両絶詩は、忠州に別れを告げ、尚書司門員外郎として朝廷に返り咲こうとして詠んだものである。其一詩にいう、

二年留滯在江城、草樹禽魚盡有情。　二年留滯して江城に在り、草樹禽魚　盡く情あり。
何處殷勤重迴首、東坡桃李種新成。　何處ぞ殷勤に重ねて首を迴らさむ、東坡の桃李　種ゑて新たに成る。

このような「東坡に植えた桃李がやっと大きくなってきた、その樹に後ろ髪を引かれる思い」とは、朝廷に復帰するという喜びがあって初めて成立する、詩人としての気取った物言いであろう。また、「西省にて花に対し（以下略）」詩は、後に白居易が中書省の花を見て、かつて忠州の東坡に植えた花を思い出して詠んだものである。

このように白居易の詩に「東坡」の文字が登場する時、読者は、白居易の政治的不遇の消憂や政治への意欲、そして今や朝廷に復帰した意気揚々とした気分を読みとることができるのである。蘇軾は、白居易に後れて生まれること二百六十余年であるから、白居易の「東坡」に対する思いを一度に知ることができる。もともとは貶謫地の城東の堤にすぎない「東坡」が、後には朝廷で懐かしく思い出せるのである。ならば「東坡」とは、吉兆ではないか。そこで蘇軾は借地に「東坡」と名づけ、「東坡八首」詩を詠み、「東坡居士」と名号したのである。

蘇軾が日頃白居易の文学を敬慕していたのは確かであろう。しかしここで蘇軾が「東坡」を用いて命名した所以

は、それだけではなく、また単に同じ貶謫の身の自分を古人に比してみたというだけでもなく、より積極的に、白居易と同様にいつかは朝廷に復帰したいという経歴上の敬慕であり、密やかな、そして強い願望を表わしているのである。

筆者がこのように考えるのには、ふたつの理由がある。まずその第一は、蘇軾が黄州流謫時期に儒教経典に注釈を施した、その動機にある。蘇軾がこの時期に『易伝』と『論語説』を執筆したことは、夙に知られているが、その執筆の動機については、従来あまり注目されていないようである。そこでその動機について考察してみたい。蘇軾は『易伝』と『論語説』のうち、既に装丁のできた『論語説』五巻を当時の権力者に送った。以下の書簡はその『論語説』に付けたものである。

多難に窮苦し、壽命期すべからず。恐らくは此の書一旦復た淪没すれば傳はらざらむ。意は數本を寫して人間に留めむと欲す。念ふに新たに文字を以て罪を得ば、人　必ず以て凶衰不祥の書となし、收藏を肯へんずるなからむ。又自ら一代の偉人に非ざれば、託するに足らず。以て必ず傳へむとせば、之を明公に獻ずるにしくはなし。（中略）公　退間の暇に、一たび爲に之を讀まば、就ち取るなからしむるも、亦たその窮して道を忘れず、老いて能く學ぶを見るに足る也。[5]

（「黄州にて文潞公に上る書」）

この書簡の宛名は、文潞公すなわち文彦博であり、元豊年間に西京の太尉留守を務めた権貴の者である。もともと文彦博は枢密副使、参知政事を務める中央の官僚であったが、王安石と対立して地方官を歴任し、「身は外に在るといえども、帝眷の加ふる有り。[6]」によって、留守太守が命じられたのであろう。蘇軾はその文彦博から書簡を受け取り、この書簡を以て返書とした。文中に「当世の偉人でなければ託すことはできない、託すのであれば、あなただ」というのは、王安石に対立した文彦博の経歴に、蘇軾自身のそれを重ねての謂いであろう。そもそも当時の人は幼時からの目標として、科挙に及第し官吏になり経世済民の政治に参与することを掲げていた。蘇軾も例外ではなかった。しかし今、蘇軾は政治的権力を剝奪されたのである。その煩悶は並々ならぬものがあったであろう。

そして蘇軾はなおも士大夫として生きようとし、しかも自分が士大夫として生きていることを他人に知ってほしいと願い、儒教経典に注釈を施して、わざわざ中央の官吏にそれを送り、その態度を表明しようとしたのである。なんという儒教思想の浸透ぶりであろうか。

次に、筆者が蘇軾の「東坡」の命名には朝廷復帰願望があると考える第二の理由は、蘇軾が黄州を去って二年後、翰林院学士知制誥に任ぜられた時、すなわち朝廷に返り咲いた時、蘇軾自ら「経歴的に自分は白居易によく似ている」といっているからである。それは以下の詩である。

軾　去歳春夏を以て、邇英に侍立し、而して秋冬の交に、子由　相ひ繼ぎ入侍す、絶句四首に次韻し、各々懐ふ所を述ぶ。[7]

其四

微生偶脱風波地、晩歳猶存鐵石心。　微生　偶々風波の地を脱し、晩歳　猶ほ鐵石の心を存す。
定似香山老居士、世縁終淺道根深。　定めて似る香山老居士の、世縁終に淺けれども道根深かりしに。

公自注（前略、蘇軾は白居易と自分の経歴をそれぞれ述べる）出處と老少、大略相ひ似る、庶幾はくば復た此の翁の晩節の閑適の樂を享けむことを。[8]

蘇軾は詩中の「鉄石心」を黄州時期の書簡の中でも使っている。すなわち、蘇軾の友人李公択が蘇軾の貶謫を慰めたので、蘇軾は次のように返書したのである。「私は鉄や石のような固い心であなたに接しているのに、あなたはどうして気落ちしているのか。私は人の行うべき道（道理）も忠義も心得ている。もし皇帝や人民のために何かする機会がきたら、捨て身で働こうと思っているのだ」[9]。そして蘇軾は前掲の詩で「貶謫されても道理と忠義の固い心は変わらない。確かに香山居士のように世俗のことには恵まれなかったが、修道にはなったようだ。」と詠うのである。さらに自注では「奇しくも白居易と同じ年頃で貶謫され、今また同様に朝廷に復帰した、晩年も同様に閑適の楽しみを得たい」と願っている。つまり蘇軾は、皇帝への忠義を示し、白居易のような晩年の閑適の楽しみを

得て、官吏として一生を全うしたいと願うのである。

以上のように蘇軾には、貶謫されてもあくまでも士大夫としての生き方を全うしたいという、並々ならぬ儒教思想がある。そして白居易の経歴に自分のそれを重ね、晩年の閑適の楽しみをも得たいと願ったのであった。そこで筆者は、蘇軾が黄州流謫時期において「東坡」を借地名とし、また「居士」名に「東坡」と名号したのは、白居易の文学のみならず、その経歴を敬慕し、白居易と同様に朝廷に復帰したいと、密かに切望していたことによるものと考える。

二

では、蘇軾はなぜ仏教の在家信徒の表明である「居士」と称したのであろうか。ここでは、「居士」名に「東坡」を付したことではなく、「居士」と称したこと自体に重点をおいて論じることにする。すなわち、蘇軾の黄州流謫時期における宗教への傾倒を、従来の研究成果を踏まえながら略述し、その疑問点も述べよう。

蘇軾は、今回罪を得たことを自ら反芻し、自己の生き方の枝葉末節をどんなに改めても、根本を改めないことには、何度でも同じ失敗を繰り返すと考えた。そこで城南の安国寺に足繁く通い、新たな生き方を模索し、「身心皆な空」すなわち「悟り」の境地にまでいったという。以下にその根拠とされる蘇軾の「黄州安国寺記」の一部を掲げる。

深く自ら省察すれば、則ち物我相ひ忘れ、身心皆な空にして、罪垢の従りて生ずる所を求むるも得べからず。[10]

また蘇軾は道教にも興味を示した。元豊三年、すなわち、黄州に到着した年の暮れに道観に籠った。これは思索するより、養生のためであったようである。注目に値するのは、蘇軾が、これらの安国寺通い、道観籠りのいずれもから、その思想を積極的に取り入れようとしていることである。[11]（傍線部）つまりこれは、前述のように儒教経典に注釈をし

て士大夫としての態度表明をしたり、後述のように自重を表明したりする公的立場を維持しつつ、それに伴う緊張状態を和らげ、精神の均衡を保ち、身心の疲労を防ぎ、日々を遣り過ごすために、私的立場において積極的にとった手段といえよう。

事実、この時期の蘇軾の詩には、仏教や道教の語彙がふんだんに盛り込まれている。例えば以下の詩句の通りである。

莫把存亡悲六客、已將地獄等天宮。　存亡を把て六客を悲しませる莫れ。已に地獄を將て天宮に等し。

（「元素に答ふるに次韻す」）

六客とは、蘇軾及び詩題にある元素すなわち楊繪の共通の友人達であり、この時或る者は既に没し、或る者は遠方にいる。そこでこの詩句の内容は「友人達の存亡をもって、六人の友人を悲しませないでくれ給え、私はすでに地獄も天宮に等しい悟りの境地にいるのだから。」ということである。この「地獄も天宮に等しい」とは、仏教経典に見えるように、「念仏する男子はついに覚り、地獄も天宮も皆な浄土になって感じる」という境地に他ならない。[12]蘇軾はこの時自らそれを宣言するのである。

また蘇軾の弟蘇轍は、蘇軾の文学は黄州に謫居してから一変し、とても自分には及びもつかないものとなった、といっている。それは以下の通りである。

既にして黄に謫居し、杜門深居し、翰墨を馳騁し、其の文　一變し、川の方に至るが如く、而して轍　瞠然として及ぶ能はざる矣。後に釋氏の書を讀み、深く實相を悟り、之を孔・老に參し、博辯無礙、浩然として其の涯を見ざる也。[13]

（蘇轍「亡兄子瞻端明墓誌銘」『欒城集』巻二十二）

以上のことを考えあわせると、「居士」と称したからには、蘇軾に宗教上の変化があったのだと考えるのは、自然

であろう。

しかし同時に、この考えが文献上不確かな面を持つことも、明らかにしておかなければならない。まず第一に、蘇軾はこの時期に「居士」と称すと明言していないことである。「東坡居士」と称したとは、前掲の蘇轍の記した墓誌銘に拠っている。なぜ蘇軾は明言して詩の一首でも詠まなかったのであろうか。

また従来の研究では、蘇軾が仏教に傾倒し、悟りの境地に至ったことを、前掲の「黄州安国寺記」に根拠を求めていた。しかしこの記には、自分の体験（前掲の記述を含む）を述べた後、寺の僧継連の逸話を述べ、さらに以下の説明が加えられている。

七年、余　將に汝への行に臨むあらむとす。連　曰く、「寺には未だ記有らず。」石を具へ之に記さむことを請へり。余　辭するを得ざりき。[14]

つまり、この記は蘇軾が自発的に書いたものではなく、安国寺の僧継連に委託されて書いたものである。そのような場合、仮に蘇軾が寺で何も得ることがなかったとしても、それを率直に告白できるであろうか。寺で「身心皆な空」になったと述べるのには、多少の誇張が含まれていないだろうか。この記をもって蘇軾が仏教の信仰を深めたと考えるのは、早計にすぎるだろう。

さらに、蘇轍が記した前掲の墓誌銘のうち、後半の「後に釋氏の書を讀み、深く實相を悟り（以下略）」の一文は、出所に疑問がある。これは夙に故吉川幸次郎氏が指摘されていることであるが、[15] この部分は蘇轍の『欒城集』にはあるが、南宋・施元之の『施註蘇詩』に載せる「墓誌銘」には、記していない。施元之註は、蘇詩註の中でも重視されるが、なぜこの部分を記さなかったのか。果たして「仏典を読んで悟った」とは、確かに蘇轍の言葉であるのだろうか。この点にも疑問が残る。蘇軾がこの時期に宗教に傾倒したことは否定できないが、さてどこまで信仰を深めたといえるであろうか。

三

ではここで観点を変え、宋代朝廷の仏・道教政策について考えてみたい。既に知られているように、宋代朝廷はその建国時期から積極的に仏教と道教を治政に取り入れた。[16] それは勿論、儒教を主体とし、国家がうまく治まるように、宗教を有効的に利用しようと考えたためである。

例えば出版物からそれを確かめると、[17] 主なものを拾っただけでも、宋代朝廷は、太祖開宝四年（九七一年）に仏典の集大成である『大蔵経』を出版し、太宗太平興国初年（九七六年）には『大宋僧史略』を、同七年（九八二年）には『大宋高僧伝』を出版した。また太宗は首都汴京や蘇州に道観を建立し、真宗天禧三年（一〇一九年）には道蔵経である『大宋天宮宝蔵』七蔵を成した。[18] これらは皆な国家事業の成果である。

また、詔令によって政策の動きをみると、太祖は、「禁寄褐道士詔」（勝手に道士になってはならない）や「限数度僧尼詔」（僧や尼になるには、年ごとにその数を限る）などを発布し、道士や僧侶の制度の大まかな枠組みを定めた。三代目の皇帝真宗になると、「召河陽濟源道士蘭栖眞詔」（道士を宮中に招き、話をさせる）や「特度僧道詔」（寺や道観にいる少年で、まだ得度していない者は、試験をして寺では百人のうち二人を、道観では百人のうち一人を、得度させる）、「以太宗御製妙覺集編入佛經大藏詔」（太宗の文集を『大蔵経』の中に編入する）など、より細かな内容の詔令を発布している。これらの詔令の後に仏・道教関係の詔令を発しているのは、道教趣味で知られる八代目の皇帝徽宗である。そうすると太祖から三代目の皇帝真宗までの間に、宋代朝廷の仏・道教政策は、その基礎が固まったといえよう。

これを受けて六代目の皇帝神宗は、熙寧四年（一〇七一年）の春と、同七年（一〇七四年）の春に、それぞれ同一日のうちに、道観と寺院に行幸している。[19] 神宗というのは、蘇軾が「烏台詩案」によって黄州流謫となった、まさに当時の今上皇帝である。その神宗が、仏・道教を共に尊重していたことは、記憶されてよい。

要するに、蘇軾は、このような仏・道教を有効的に利用しようとする政策の下に、活動していた士大夫だったのである。蘇軾が日頃その感化を多分に受けていただろうことは、想像に難くない。前述のように、蘇軾が罪を得た

ために苦悩し、精神の安寧を得たいと願って宗教に接近したという説には、一理ある。しかし、その精神的欲求が仏・道教に向かった社会背景を今一度理解しておく必要があろう。そしてあるいは、蘇軾が「居士」と称したのは、自分は政策に忠実であるという表明であり、なんとかして皇帝によく思われたい、朝廷に復帰したいという、世俗上の願望をも含み得るのではないかと思うのである。

そうすると、「東坡」という名と、「居士」の名号とは、同じく朝廷復帰願望を含むという点で結びつきやすいといえる。そこで、前章で述べた疑問を再考してみよう。すなわち、蘇軾が「居士」について詠んだ詩がないことは、思惑のある「居士」の名号であるから、真に帰依したという詩が詠みにくいのであろう。次に、寺の僧と親しくしてその寺の記を書いたことは、政敵や皇帝に対する自己防衛や宣伝に繋がる。さらに、施元之註が、蘇轍の「蘇軾は仏典を読み深く悟った」という部分を欠落したのは、あるいは蘇軾が本当に帰依したのか疑ったのかもしれない。そして以下の蘇軾の書簡も理解しやすくなるであろう。

初めて到るに、一たび太守に見へ、自餘杜門して出でず。閑居して未だ書を看るを免れず、惟だ佛經以て日を遣り、復たは筆硯を近づけざる矣。[20]

（「章子厚参政に與ふる書二首其一」）

実際にはこの記述に反し、蘇軾は黄州の赤鼻磯に遊び「前後赤壁賦」を詠んでおり、また、友人にも手紙を書いている。それでもなお、中央官吏である参政、すなわち参知政事の章惇（字子厚）に、蘇軾はいかに自分が罪を反省し、自重しているかを印象づけようとした。そこには、党争に巻き込まれて罪を得ても、いかに生き抜くかを知っている、蘇軾のしたたかな姿勢が窺われるのである。

四

以上述べてきたように、筆者は、蘇軾が借地名と居士名に「東坡」と命名したのには、白居易の文学を敬慕した

ことに加えて、特別な思い入れ、すなわち朝廷復帰願望があると考える。そこで本章では、蘇軾が黄州流謫時期に詠んだ、有名な「東坡八首」詩の内容と、このことがいかに関わるかを考察してみたい。

まず「東坡八首」詩の読解から始めよう。思うに「東坡八首」詩の最大の特徴は、蘇軾がその創作を通して、苦悩から希望へと一大転機を迎えることにある。そこで、該詩の叙文の内容についてみてみよう。

余　黄州に至りて二年、日々以て困匱す。故人馬正卿　余の食に乏しきを哀れみ、爲に郡中に於いて故營地數十畝を請ひ、其の中に躬耕するを得しむ。地　既に久しく荒れ茨棘・瓦礫の場と爲れり、而して歳又大いに旱すれば、墾闢の勞、筋力　殆ど盡きぬ。耒を釋て歎き、乃ち是の詩を作り、自ら其の勤を愍む、庶幾はくは來歳の入、以て其の勞を忘れむことを。[21]

すなわち、①制作年代は、黄州に到着してから二年目、該詩の内容から二月、②当地では日々の生活が困窮していった、③友人馬正卿が兵営の跡地を借り受けてくれた、④借地は荒れ放題であったが、蘇軾自ら耕作し、来秋の収穫を願っていること、が分かる。次に、紙幅の制限により、八首のうち其の一、七、八を掲げ、その他は大意を紹介する。

其一

1 廃壘無人顧、　2 頽垣滿蓬蒿。　廃壘　人の顧みる無く、頽垣　蓬蒿　滿つ。
3 誰能捐筋力、　4 歳晚不償勞。　誰か能く筋力を捐てむ、歳晚　勞を償はじ。
5 獨有孤旅人、　6 天窮無所逃。　獨り孤旅の人有り、天　窮せしめて逃るる所無し。
7 端來拾瓦礫、　8 歳旱土不膏。　端に來りて瓦礫を拾ふべきものの、歳　旱して　土　膏ならず。
9 崎嶇草棘中、　10 欲刮一寸毛。　崎嶇たる草棘の中、一寸の毛を刮らむと欲す。
11 喟然釋耒歎、　12 我廩何時高。　喟然として耒を釋てて歎ず、我が廩　何れの時にか高からむ。

其二

土地の高低によって耕作に適した作物がある。近隣の蜀人が桑の実を分けてくれる。そのうち我が家を築こう。収穫は覚束ないが、古井戸が見つかって飲料水は確保できた。

其三

旱魃のため泉も涸れ果て耕作が困難であったが、昨夜雨が降り、泥の中には芹が芽を僅かに出している。ゆくゆくはこれと鳩肉を和え物にしよう。

其四

清明節を前に稲の種を蒔く。やがて春には苗が芽生え、夏には葉先が風に翻り、秋には実りがあろう。ゆくゆくはきっと新米が味わえよう。

其五

畑の地力からいえば、ここが十年荒れ地だったのはむしろ幸いであった。桑の木はまだ大きくならないが、麦は期待できそうだ。農民が「麦の苗を牛羊によく踏ませよ」と助言してくれた。私はその言葉に感謝する。

其六

棗や松の収穫は十年以上も先のことだが、私の計画はただひたすら。かつての同僚が三寸もの大蜜柑を届けて下さったが、この苗が手に入らないものか。私はもうその実がなるのを想像する。

其七

1 潘子久不調、　2 沽酒江南村。　潘子は久しく調せられず、酒を江南の村に沽る。
3 郭生本將種、　4 賣藥西市垣。　郭生は　本　將種、藥を西市の垣に賣る。
5 古生亦好事、　6 恐是押牙孫。　古生も亦た好事、恐らくは是れ押牙の孫ならむ。
7 家有一畝竹、　8 無時容叩門。　家に一畝の竹有り、時無く門を叩くを容す。
9 我窮交舊絶、　10 三子獨見存。　我　窮して交舊絶つものの、三子　獨り存めらる。
11 從我於東坡、　12 勞餉同一飧。　我に東坡に從ひ、勞餉　一飧を同じくす。

13可憐杜拾遺、14事與朱阮論。　憐むべし　杜拾遺の、事　朱・阮と論ずるを。
15吾師卜子夏、16四海皆弟昆。　吾　卜子夏を師とし、四海皆な弟昆とならむ。

其八

1馬生本窮士、2從我二十年。　馬生は　本　窮士、我に從ふこと二十年。
3日夜望我貴、4求分買山錢。　日夜　我が貴を望み、買山の錢を分かたむことを求む。
5我今反累君、6借耕輟茲田。　我　今　反て君を累(わずら)はし、借耕して茲の田を輟(や)む。
7刮毛龜背上、8何時得成氈。　毛を龜背の上に刮るに、何れの時にか成氈を得む。
9可憐馬生癡、10至今夸我賢。　憐れむべし　馬生の癡なるを、今に至るまで我が賢を夸る。
11衆笑終不悔、12施一當獲千。　衆　笑へども終ひに悔いず、一を施して千を獲るに當る。

さて、該詩八首を通して、蘇軾の嘆きは次第に回復し、やがて希望を持つに到る。該詩の嘆きとは、まず叙文にいう、耕作が瓦礫と旱魃のために困難であること、また、其一詩11、12句においても同様にいう、一体何時になったらこの地から米が十分に穫れようかということ、つまり茫漠とした将来への不安である。

ところがそれが次第に希望へと変化する。以下、その変化が何によって齎されるかについて考察してみたい。まず挙げられるのは降雨である。これを該詩八首の時間の推移の中で捉えてみよう。すなわち、前述のように叙文と其一詩において、瓦礫を拾い耕作するのが旱魃のために困難であるといっていたのが、其三詩9～12句「昨夜南山雲、雨到一犁外。泫然尋故瀆、知我理荒薈。」で、天が蘇軾の耕作の困難さを知って慈雨を降らし、その結果耕作が楽になったといい、そして其五詩1、2句「良農惜地力、幸此十年荒。」では、耕作に苦労した荒れ地に却って地力があると感謝すらしているのである。また、其二詩5、6句「江南有蜀士、桑果已許乞。」及び其五詩3、4句「桑柘未及成、一麥庶可望。」から、其二詩において桑の実を近隣の同郷人から分けてもらう予定だったのが、其三詩の降雨を経て、其五詩では既に桑の実を植えたことが想像される。このように、其三詩の降雨を境に蘇軾の耕作は好転し、桑の実を植え、苦労した荒れ地に却って感謝する心の余裕ができ、希望に満ちてくることが分かる

のである。

次に、蘇軾に希望を齎したのは、該詩八首に登場する人々である。まず其一詩5、6句で、蘇軾は自分自身を孤獨で過酷な状態にあると認識していたが、其二詩5、6句「江南有蜀士、桑果已許乞。」で、近隣の同郷人に桑の実を分けてもらうことになったこと、同詩11、12句「家僮燒枯草、走報暗井出。」で、蘇軾の下僕が古井戸を見つけたと報告したこと、さらに其五詩7～10句「農夫告我言、勿使苗葉昌。君欲富餅餌、要須縱牛羊。」で、農民が耕作について助言してくれたこと、其六詩9～12句「我有同舍郎、官居在灊岳。遺我三寸甘、照座光卓犖。」では、かつての同僚が大蜜柑を送ってくれたことをそれぞれ詠う。このように、同郷人、下僕、農民、かつての同僚と範囲を広げて、蘇軾に協力してくれる人々を詠う。そして其七詩で、自分に従ってくれる無名の三人を長々と紹介し、「吾師卜子夏、四海皆弟昆。」と詠い、「孔子の弟子である卜商（字子夏）がいうように、世間の人々皆なと兄弟のようになろう、そうすれば孤獨ではない」と、高らかに宣言するのである。この三人の名は、市井の人々であるから蘇軾が詩に書き残したことでやっと後世に伝わったのである。よって記名は、蘇軾の三人に対する謝辞とも取れる。しかしそれは単なる謝辞だけではなく、蘇軾が、自分に協力してくれる身近な人々から、より広く世間の人と兄弟のようになろうと宣言する、その過程の橋渡し的存在を表現している。つまり三人は、血縁地縁関係ではなく、友情によってこそ蘇軾に集う人々であり、この情をもってすれば、孤独な蘇軾もまた未知の人々と親しくすることができるであろう。それを伏線として、末両句の「吾師卜子夏、四海皆弟昆。」を導き出し、今後は孤獨ではないと詠うのである。其八詩は、その宣言の余波のように、馬正卿のためだけに一首を割き、9～12句のように、ただ馬生に感謝し慈しむ気持ちに溢れ、叙文に述べた、馬生の援助を得て開墾に至ったことと対応して、結びとするのである。

さてここで、蘇軾に希望を齎した第三の点を考察するために、視点を変えて、該詩の土台を構成するものから考えてみよう。その土台とは、空腹である。其一詩11、12句で米を、其二詩13、14句「一飽未敢期、瓢飲已可必。」で一食の糧と水を、其三詩13～16句「泥芹有宿根、一寸嗟獨在。雪芽何時動、春鳩行可膾。」で芹と鳩肉の和え物を、其四詩17、18句「行當知此味、口腹吾已許」で新米を、其五詩9～12句「君欲富餅餌、要須縱牛羊。再拜謝苦

言、得飽不敢忘。」で餅餌を、其六詩11～12句「遺我三寸甘、照座光卓犖。」で大蜜柑を、其七詩11、12句で一飯をそれぞれ詠み、各詩が食物に関する内容となっている。それは飢えた者がしきりに食物のことを思うようであり、かつて中央官吏であった蘇軾ほどの人物が、流謫前と大きな落差のある生活を強いられていることが偲ばれる。ところが、其八詩では直接に食物に関する詩語は出てこない。これはなぜだろうか。

前述のように、天候が蘇軾に味方したことは、蘇軾にとって確かに有り難いことであったが、それは該詩の背景にすぎず、主眼ではない。その主眼とは、孤獨な旅人が、身近な人から徐々に範囲を広げ、広く人々の協力を得て、ついに世間の人々皆なと兄弟のようになろうと宣言し、以後は孤獨ではないという喜びを表現したこと、つまり、詩八首全体を通してその頑なな心を溶かしてゆく過程と結果にある。振り返ってみれば蘇軾は、「烏台詩案」すなわちその詩文のために御史台に投獄されるという、いわれの無い罪を着せられ、「東坡八首」詩を詠む前に嘆いているように、宗教に救いを求めたが思うように身心の緊張状態は緩和されなかった。[22] その孤獨な旅人という認識のある蘇軾が、今まで述べてきた変化を遂げたのは、人々の協力という温かみのためであった。餓えのなかで人々のその温かさに触れるうちに、蘇軾はついに、頑なな心も餓えも超越したのである。そこで蘇軾は、其八詩では食物を詠まず、また、八首全体の構成上の締めくくりとして、其八詩を叙文と対応させ、叙文で言及した馬生を再び登場させ、さらに、其一詩の「一寸の毛を刮らむと欲す。」を受けて、其八詩で「毛を龜背の上に刮るに、何れの時にか成氈を得む。」とユーモラスにいい、詩人としての態度を取り戻し、単なる空腹の詩ではなくしたのである。

このように「東坡八首」詩は、いかにも蘇軾の曠達さを表わす、代表作ともいうべき作品である。ところが不思議なことに、該詩のなかには、仏典や道教の聖典を出典とする詩句は見当たらないのである。該詩を詠む前には、蘇軾は仏・道教書からの引用を好んで詩に詠み込み、それが役に立たないと嘆き、[22] 該詩を詠んだ後は次第に仏教に傾倒するさまが窺われる。[23] ところが該詩に限ってその引用が見当たらないのである。「東坡」という、後には居士名にもなり、宗教と関連のありそうな詩題であるにも関わらず。

「東坡八首」詩の鍵になる句は、前述のように其七詩の「孔子の弟子である卜商がいうように、世間の人々皆なと兄弟のようになろう、そうすれば孤獨ではない」である。これは、『論語』顔淵篇に典故がある。すなわち、兄

が無法者で今にも身を滅ぼしそうなため、弟の司馬牛が憂えていう、「人には皆な兄弟があるのに、私だけにはいない。」そこで卜商が「『死ぬも生きるも定めが有る』と聞いている。あなたの兄さんのことも仕方がない。しかし君子は慎んで落ち度が無く、人と交際するのに礼を守ってゆけば、世界中の人は皆な兄弟のようになる。君子はどうして実の兄弟がいないことなど気にかけようか。」というのである。

蘇軾は「東坡八首」詩の中で、宗教ではなく、自分が幼い頃から暗記して、肌に染みついている『論語』を思いだし、その境地に至ったのである。いかに儒教と仏・道教の思想に共通する点があり、蘇軾に仏・道教の影響があったにせよ、この詩の中では、蘇軾は儒教思想を全面に押し出したのである。

このように蘇軾の根本には儒教思想がある。そして蘇軾がその「東坡」を仏教居士の名にしたのは、儒教的成功すなわち朝廷復帰への方便をも含むのである。「東坡居士」の名号に確かに白居易文学への敬慕や精神の安寧への渇望があるとしても、それだけでは蘇軾の一面を見たことにしかならないであろう。

おわりに

最後に蘇軾の生涯を通して考えてみたい。王水照氏は蘇軾を論じて、「儒教思想がその根本にあるが、在職時期は儒教思想を主とし、貶謫時期は仏・道教思想を主とし、状況に合わせてこれらの思想を使い分けている」という。[24] 確かに流謫時期に政治的発言をすれば、また政敵に陥れられることも有り得る。そこで、表向きは政治的なことをいわず、ひたすら宗教に精進し、反省の色を表わしていたと考えられよう。

しかし内面的には、それでもなお、黄州流謫時期の「東坡」に込められるように、儒教思想と、密やかな切望がある。その流謫時期の止むに止まれぬ儒教思想の発露を見てこそ、蘇軾の全体像、ひいては宋代の文人像が初めて根底から理解できるのではないだろうか。

注

＊底本には、清・王文誥輯註、孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、一九九二年第三次印刷）、孔凡礼点校『蘇軾文集』（中華書局、一九九二年第三次印刷）を用いた。

（1）『蘇文忠公詩編注集成総案』巻十九

（2）鍾来因『蘇軾与道家道教』（台湾学生書局、民国七十九年、三一〇頁）では、当時「居士」とは仏教徒も道教徒も称したものであるから、蘇軾が仏教徒であったとは断言できないという。しかし筆者は、従来の説通り「東坡居士」とは在家の仏教徒と考える。というのは、蘇轍が書いた「亡兄子瞻端明墓誌銘」に、蘇軾が没した時の様子として「太学の士たちが仏僧に施しした」といい、また、蘇軾の散文は、道教より仏教について書かれたものが明らかに多いからである。

（3）白樂天爲忠州刺史、有「東坡種花」二詩。又有「步東坡」詩云「朝上東坡步、夕上東坡步。東坡何所愛、愛此新成樹。」本朝蘇文忠公不輕許可、獨敬愛樂天、屢形詩篇。蓋其文章皆主辭達、而忠厚好施、剛直盡言、與人有情、于物無著、大略相似。謫居黄州、始號東坡、其原必起于樂天忠州之作也。

（4）岩波書店、一九九二年第十五刷、一八〇頁。

（5）窮苦多難、壽命不可期。恐此書一旦復淪没不可傳、意欲寫數本留人間。念新以文字得罪、人必以爲凶衰不祥之書、莫肯收藏。又自非一代偉人不足託、以必傳者、莫若獻之明公。（中略）公退閒暇、一爲讀之、就使無取、亦足見其窮不忘道、老而能學也。

（6）『宋史』巻三百一十三文彦博伝。

（7）軾以去歳春夏、侍立邇英、而秋冬之交、子由相繼入侍、次韻絶句四首、各述所懷。

（8）出處老少、大略相似、庶幾復享此翁晚節閑適之樂焉。

（9）某啓。示及新詩、皆有遠別惘然之意、雖兄之愛我厚、然僕本以鐵心石腸待公、何乃爾耶。吾儕雖老且窮、而道理貫心肝、忠義塡骨髓、直須談笑於死生之際、（中略）、兄雖懷坎壈於時、遭事有可尊主澤民者、便忘軀爲之、禍福得喪、付與造物。

（「與李公擇十七首其十一」）

（10）深自省察、則物我相忘、身心皆空、求罪垢所從生而不可得。

(11) 道不足以御氣、性不足以勝習。不鋤其本、而耘其末、今雖改之、後必復作。盍歸誠佛僧、求一洗之。得城南精舍曰安國寺、（中略）間一二日輒往。非久、冬至、已借得天慶觀道堂三間、燕坐其中、謝客四十九日、雖不能如張公之不語、然亦常闔戸反視、想當有深益也。（「黄州安國寺記」）

(12) 善男子。一切障礙即究竟覺。得念失念無非解脱。成法破法皆名涅槃。（中略）地獄天宮皆爲淨土。（「與王定國四十一首其八」）（『大方廣圓覺修多羅了義經』）

(13) 既而謫居於黄、杜門深居、馳騁翰墨、其文一變、如川之方至、而轍瞠然不能及矣。後讀釋氏書、深悟實相、參之孔・老、博辯無礙、浩然不見其涯也。

(14) 七年、余將有臨汝之行。連曰「寺未有記。」具石請記之。余不得辭。

(15) 吉川幸次郎「蘇東坡の文学と仏教」（『吉川幸次郎全集』巻十三　筑摩書房、昭和四十四年、二七〇頁）

(16) 姚瀛艇主編『宋代文化史』（河南大学出版社、一九九二年、第五章仏道的流行与儒仏道思想的融合、一一一～一三〇頁）参照。

(17) 李致忠「宋代刻書述略」（『文史』十四輯）参照。

(18) 『宋大詔令集』巻第二百二十三、政事七十六、道釈上

(19) 『宋史』巻十五　神宗本紀「（熙寧四年春正月）庚子、幸集禧觀宴從臣、又幸大相國寺、御宣德門觀燈。」「（熙寧七年春正月）壬子、幸中太一宮宴從臣、又幸大相國寺、御宣德門觀燈。」

(20) 初到、一見太守、自餘杜門不出。閑居未免看書、惟佛經以遣日、不復近筆硯矣。

(21) 余至黄州二年、日以困匱。故人馬正卿哀余乏食、爲於郡中請故營地數十畝、使得躬耕其中。地既久荒爲茨棘瓦礫之場、而歳又大旱、墾闢之勞、筋力殆盡。釋耒而歎、乃作是詩、自愍其勤、庶幾來歳之入以忘其勞焉。

(22) 例えば「空山古寺亦何有、歸路萬頃青玻璃。」（「與子由同游寒溪西山」詩）等。

(23) 例えば「人間得喪了無憑、只有天公終可倚。」（「任師中挽詞」）等。

(24) 王水照選注『蘇軾選集』（上海古籍出版社、一九八四年、八～九頁）